

# 加賀検定

## 第7回 加賀ふるさと検定試験問題

初級 (全60問)

解答及び解説付

2019年12月15日

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

各問題に対して、それぞれ①～④までの選択肢の中に正解が1つあります。解答用紙に、正解と考える番号を1つだけ○で囲って下さい。(黒色のエンピツもしくはボールペンを使用のこと)

1 汚れてきた和服や帯などをいったんほどいて洗い、糊をして板に張って干す洗濯の仕方を( )という。

- ①糊張り ②布張り ③洗い張り ④衣張り

今日のようにクリーニング店や洗濯機のない時代は、和服は縫い糸をほどいて湯か水で洗い、糊付けして張り板に貼り付けて乾燥させ、乾いたら剥がして、再び縫い直して着ました。この作業を「洗い張り」といいます。これに対して、衣服をほどかずにそのままの状態を洗うことを「丸洗い」といいます。(『学習帳 民俗編(改訂版)』20頁)

2 衣服は、日常着用する普段着とハレの日や町などに出かける時に着用する( )を使い分けていた。

- ①だて服 ②よそいき ③お出かけ服 ④上等服

昭和30年頃までは、日頃、着ている服を「普段着」といい、その多くは汚れていたり、ツギハギだったり、現代と比べると実に粗末なものでした。一方、特別な日(ハレの日)や町へ出かけたりする時には「よそいき」と称して、新品だったり普段着より綺麗な服を着ました。特に上等の服は「いっちょうら(一張羅)」と言って大切にしました。(『学習帳 民俗編(改訂版)』22頁)

3 昔、町方では、屋根に「こぼ」と呼ばれる板を置き、その上に石をのせていた。一方、農村部では( )と呼ばれる草で屋根を葺いていた。

- ①ぶたくさ ②雑草 ③かや ④菜種がら

町方と村方では家の造りが違って、町は「うなぎのねどこ」型で屋根も「こぼ」とよばれる板葺きでした。一方、村では部屋の間取りが「田の地型」で、屋根は「かや」とよばれる草葺きでした。(『学習帳 民俗編(改訂版)』26頁)

4 かぶら寿司は金沢の郷土料理の一つであるが、加賀市では、大根と鰯をこうじ漬けにした( )がよく作られ、庶民の味となっていた。

- ①鰯ずし ②こうじずし ③ぶり大根 ④大根ずし

金沢と加賀市では同じこうじ漬けでも対照的です。金沢では、かぶらとブリを使った、幾分高級な「かぶら寿司」が中心で、お歳暮などの贈答品としてもよく使われています。一方、加賀では大根と鰯のこうじ漬けの「大根ずし」が中心で、こちらの方は庶民の味とされています。(『学習帳 民俗編(改訂版)』32頁)

5 当地方で使われていた「てんぽな」という方言は、物事の状態が( )時に使用した。

- ①大変な ②かたい ③柔らかい ④悪い

「てんぽな」とはものの程度が「大変ひどい」、極度な状態を指す時に使いました。この言葉は東北から北陸、近畿、四国、瀬戸内まで広く使われていますが、関東や東海、九州ではほとんど使われておらず、広範囲で使われてきた方言といえます。(『学習帳 民俗編(改訂版)』37頁)

6 加賀市で最も高い山は、1,368mの（ ）で、小松市や福井県と接している。

- ① <sup>くらかけやま</sup>鞍掛山      ② <sup>かりやすやま</sup>刈安山      ③ <sup>はくさん</sup>白山      ④ <sup>だいにちさん</sup>大日山

大日山は加賀市で最も高い山で、その高さは1,368mあります。福井県勝山市と石川県加賀市、それと小松市との境に位置しています。石川県側は富士写ヶ岳とともに山中・大日山県立自然公園に含まれており、大日如来を祀った山であるとの伝説からその名がついたと言われていました。(『学習帳 自然・動植物編(改訂版)』8頁)

7 一般に、山間部では川筋の谷によって生活圏が分かれているが、動橋川上流の集落やその山間部の杉ノ水町は（ ）谷地区として、古くは焼き畑や炭焼きを生業としていた。

- ①南      ②北      ③東      ④西

大聖寺川上流の谷筋は西谷地区、動橋川上流の谷筋は東谷地区と呼ばれています。大土町や今立町、荒谷町は動橋川上流域に位置しているので東谷地区ですが、大聖寺川上流に位置する杉の水町も例外的に東谷地区に含まれています。これは昔、杉の水村の人々の仕事や買い物、学校などの生活圏が東谷地区の荒谷村との交流が密であったことによります。(『学習帳 自然・動植物編(改訂版)』11頁)

8 加賀市を流れる長い川は2本あり、大聖寺川は動橋川の約（ ）倍の長さである。

- ① 1.5      ② 2      ③ 2.5      ④ 3

大聖寺川の長さは38km、動橋川の長さは、20.4kmで、ともに大日山を源流としています。大聖寺川は山中温泉から大聖寺を経て、塩屋海岸で日本海に注いでいます。一方、動橋川は山中温泉の東谷地区を経て、塔尾町から二子塚町、動橋町などを通して、最下流で中島町から柴山淵に注いでいます(『学習帳 自然・動植物編(改訂版)』9頁)

9 加賀市の気候観測点は（ ）にあり、雨量・風・気温などを観測している。ここでの年平均気温は約13度である。

- ①大聖寺      ②塩屋      ③片山津      ④菅谷

加賀市の気象観測点は山中温泉の奥「菅谷」にあります。2013年に栢野町から現在地の菅谷に観測所が移設されました。観測所は通称「アメダス」と呼ばれ、降水量、風向・風速、気温、日照時間、積雪深などが記録されています。(『学習帳 自然・動植物編(改訂版)』13頁)

10 加賀市の海岸部では、ヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林帯）といわれる平地の植物が生育しており、その主な植物は、（ ）やスダジイなどである。

- ①タブ      ②スギ      ③アケビ      ④カラマツ

加賀市の植生は、低地の「ヤブツバキクラス」域と、少し標高の高い「ブナクラス」域の二つに分かれます。低地の「ヤブツバキクラス域」では、ツバキ・カシ・タブ・シイ等の常緑広葉樹が見られます。一方、山間部や山の中腹にあたる「ブナクラス域」ではブナやトチノキ、ミズナラなどの落葉樹が見られます。(『学習帳 自然・動植物編(改訂版)』16頁)

11 世界で最初に人工雪の結晶をつくることに成功した、片山津温泉出身の（ ）は、のち東京帝国大学理学部を卒業して、理化学研究所に入り寺田寅彦に学んだ。

- ①本川弘一      ②木村有香      ③中谷宇吉郎      ④畑久治

中谷宇吉郎は、加賀市出身の世界的な雪の科学者の一人であり、片山津温泉で誕生→大聖寺(錦城小)→小松(中学)→金沢(四校)→東京(帝大)へと進学しました。卒業後は理化学研究所に勤め、その後北海道帝大へ移り教授となり、昭和11年、世界で最初に「人工雪の結晶」をつくることに成功しました。(『学習帳 産業・人物編』39頁)

12 山中漆器の蒔絵師（ ）は、山中村の蒔絵伝習所で修行し、後に金沢で先達から学び、硯箱などの高級漆器の蒔絵を施し、多くの傑作を残した。

- ①飛鳥井清 ②大下雪香 ③中村秋糖 ④柿沢理平

現加賀市山中温泉下谷町出身の大下雪香は明治20年(1887)山中村の蒔絵伝習所に入所して修行しました。以後、金沢に出て蒔絵の先達から学び、同27年に独立して蒔絵工房を開き、硯箱・棚・卓などの高級漆器に蒔絵を施し、数々の傑作を残し、山中漆器の代表的な作家となりました。(『学習帳 産業・人物編』28頁)

13 現在の加賀市三木町出身の政治家で、農林大臣となった（ ）は、戦後の食糧不足に取り組み、柴山瀉の干拓事業などに力を注いだ。

- ①石川 嶂 ②坂田英一 ③相川久太郎 ④大塚志良

戦後加賀市から国会議員となり大臣になったのは、竹田儀一と坂田英一の二人です。敗戦後の政体の変化と混乱や貧困と食糧不足の時代、大聖寺出身の竹田儀一は芦田内閣で厚生大臣に、三木町出身の坂田英一は佐藤内閣で農林大臣になり活躍しました。(『学習帳 産業・人物編』34頁)

14 第14代藩主前田利𨮞に認められた（ ）は、国内外の情勢をよく把握し、幕末における大聖寺藩のご意見番として多くの後輩を育てた。

- ①東方芝山 ②渡辺卯三郎 ③梅田五月 ④林 清一

大聖寺藩士の東方芝山は、利義・利行・利𨮞の3代にわたる藩主に仕え、特に最後の藩主利𨮞の信任が厚く、求めに応じて幕末における藩政改革を提言しました。芝山の考えによって、大聖寺藩は幕末から明治の混乱を乗り切ることができたともいえます。幕末から明治にかけて大聖寺藩で活躍した人材のほとんどが、芝山の門下生であったと言われています。(『学習帳 産業・人物編』42頁)

15 加賀市中央公園の屋内遊戯施設、かが（ ）は、年齢に応じた遊具エリアがあり、親子で一緒に楽しく過ごすことができ、大変人気がある。

- ①わくわくランド ②にこにこランド ③にこにこパーク ④キッズパーク

加賀市中央公園に2018年4月8日にオープンした加賀市最大の室内遊び場かがにこにこパークは、月齢に応じた遊具エリアがあったり、子どもを見守りやすい環境が整っていたりするなど、親子で一緒に楽しく過ごすことができる施設です。オープンから一年の来場者数は12万5218人。予想を遥かに上回る利用がありました。(雑学)

16 例年、春から秋にかけて、山中温泉の鶴仙溪には川床が設置され、そこでは山中温泉出身の（ ）氏監修による「川床ロール」や「抹茶しるこ」などを味わうことができる。

- ①道場六三郎 ②辻口博啓 ③ダンディ坂野 ④塚田 誉

毎年4月から11月下旬までの約8ヶ月間、山中温泉の人気スポット鶴仙溪には川床が設置され、観光客は清らかな川のせせらぎの音を聴きながら、風情あるひとときを過ごすことができます。川床では、山中温泉出身の和食の鉄人、道場六三郎氏が監修したスイーツやお汁粉などを味わうことができます。(雑学)

17 鶴仙溪にかかる総檜造りの（ ）は山中温泉のシンボルともなっているが、老朽化のために架け替えられ、本年10月に完成した。

- ①こおろぎ橋 ②あやとり橋 ③黒谷橋 ④新橋

鶴仙溪に架かる総ひのきの造りの「こおろぎ橋」は山中温泉のシンボルとなっています。四季折々の風情と情緒が感じられ、一年を通じて多くの観光客が訪れます。「こおろぎ」の名の由来は、かつて行路が極めて危なかったので「行路危(こうろぎ)」と称されたとも、秋の夜に鳴くこおろぎの声に由来するとも言われています。老朽化により、本年10月12日、4代目のこおろぎ橋が完成しました。(雑学)

18 九谷焼の「<sup>ごさい</sup>五彩」とは、赤・黄・緑・<sup>こんじょう</sup>紺青と( )の5色をいう。

- ①黒色 ②白色 ③紫色 ④金色

古九谷は、力強い呉須の線描の上に、紫・緑・黄・紺・青・赤の五彩を用いて、絵の具を厚く盛り上げて描くことが特徴です。作品は花鳥、山水、風物を題材に豪放な味わいを醸し出していますが、一定の画風というものは存在せず、極めて変化に富んでいます。また、赤色を全く使わず、紫・黄・緑・紺青のうちから2色または3色で、「塗埋手」の手法で描く「青手」と称する古九谷は、大胆なデザインのものが多く、見る人に強烈な印象を与えます。(『学習帳 歴史編(改訂版)』40頁)

19 山中漆器は、天正年間、<sup>えちぜん</sup>越前から山伝いに、山中温泉の( )に<sup>きじし いじゅう</sup>木地師が移住したことを<sup>きげん でんしょう</sup>起源とする<sup>でんしょう</sup>伝承がある。

- ①大土 ②杉ノ水 ③<sup>まなご</sup>真砂 ④<sup>くたに</sup>九谷

山中塗りは、安土桃山時代の天正年間(1573-1592)に、越前から山伝いに、山中温泉の上流約20kmの真砂という集落に木地師の集団が移住したことが起源とされています。その後、山中塗は山中温泉の湯治客への土産物として造られるとともに、江戸中頃からは会津・京都・金沢から塗りや蒔絵の技術を導入して木地とともに茶道具などの塗り物の産地として発展し、山中温泉は全国的でも有数の漆器の産地となりました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』42頁)

20 現在、加賀市では、<sup>じょうもん やよい こふん</sup>縄文・弥生・古墳時代の<sup>まいぞうぶんかざい</sup>埋蔵文化財が、約( )ヶ所<sup>かくにん</sup>確認されており、<sup>いせき みっしゅうち</sup>県内有数の<sup>いせき</sup>遺跡の<sup>みっしゅうち</sup>密集地となっている。

- ①550 ②650 ③750 ④<sup>850</sup>

加賀市には、縄文、弥生、古墳時代を中心とした埋蔵文化財が、これまでにおよそ850ヶ所余り確認されており、当市は、県内有数の遺跡の密集地となっています。古代遺跡が多いということは、この地域が、水に恵まれた自然豊かなところであり、とても住みよい土地であったともいえます。(『学習帳 歴史編(改訂版)』8頁)

21 「北陸の<sup>とろいせき</sup>登呂遺跡」とも称される( )では、貴重な木製品が多数発見され、また、出土した土器の形から<sup>さんいんぶんかけん</sup>山陰文化圏との<sup>きわ</sup>結びつきが極めて強いことが分かった。

- ①<sup>ねこばし</sup>猫橋遺跡 ②<sup>しばやまでむら</sup>柴山出村遺跡 ③<sup>かしま</sup>鹿島の森遺跡 ④<sup>ゆみなみ</sup>弓波遺跡

猫橋遺跡は、市内合河町の八日市川にかかる猫橋付近を中心とした広い地域で発見された弥生時代後期の遺跡で「北陸の登呂遺跡」とも称される北陸では有名な遺跡です。この付近は、田んぼを掘ると水が湧き出るほどの湿地帯で、約1,800年前のしやもじ・くわ・はしごなどが、ほぼそのままの形で発見されました。また、稲づくりを示す炭化した米粒や大きな柱を使ったと考えられる倉庫跡や平地における住居跡も確認され、この時代、当地には、すでに村を統率する首長が存在していたと思われる。(『学習帳 歴史編(改訂版)』10頁)

22 富塚丸山古墳は、<sup>ちよつけい</sup>直径約70mの大きさであるが、これが<sup>ぜんぼうこうえんぶん</sup>前方後円墳であれば、全長( )mを超える大きさとなり、<sup>てどりがわ</sup>手取川以南では、この時期、最大の古墳であったといえる。

- ①80 ②100 ③<sup>120</sup> ④150

富塚町には21基の後期古墳群があり、丸山古墳は現在周囲を削平されて直径70mの円墳状となっていますが、江戸時代に甲冑や刀剣・勾玉等の副葬品が出土したと伝えられており、もし原型が前方後円墳ならば全長120m以上の大きさとなり、南加賀全体に君臨した巨大な権力者の墳墓だった可能性があります。(『学習帳 歴史編(改訂版)』12頁)

23 加賀市<sup>ちやくし</sup>勅使町の国指定史跡( )<sup>よこあなぐん</sup>横穴群は、古墳時代を代表する遺跡で、200基余りの

横穴があると考えられている。

- ①勅使山<sup>ちやくしやま</sup> ②天皇山<sup>てんのうざん</sup> ③法皇山<sup>ほうおうざん</sup> ④皇子山<sup>おうじやま</sup>

勅使町では、大正11年に考古学者の上田三平により、6世紀中頃から7世紀末にかけての法皇山横穴群が確認され、昭和4年には国の指定史跡となりました。法皇山の麓や中腹には、現在までに80基あまりの横穴が確認されています。古くは、原始人が暮らした洞窟だとか、宝物の隠し場所などと言われていましたが、調査の結果、古代人を埋葬した横穴墓であることが分かりました。これらの横穴の数は、詳しく調べれば、恐らく200基以上はあるだろうと考えられており、日本海側では最大級の横穴群として知られています。(『学習帳 歴史編(改訂版)』12頁)

24 平安時代、当地域の( )・温泉寺<sup>おんせんじ</sup>・極楽寺<sup>ごくらくじ</sup>・小野坂寺<sup>おのざかじ</sup>・大聖寺<sup>だいしょうじ</sup>の5つの寺院が白山五院と呼ばれ、白山信仰の拠点地となっていた。

- ①柏野寺<sup>かしわのじ</sup> ②吸坂寺<sup>すいさかであら</sup> ③作見寺<sup>さくみじ</sup> ④那谷寺<sup>なたであら</sup>

平安時代に入ると仏教がますます盛んになり、古来よりの白山信仰が、仏教思想と結びつきました。当地域では、柏野寺、温泉寺、極楽寺、小野坂寺、大聖寺の5つの寺院が「白山五院」と呼ばれ、白山信仰の拠点地として建立されたことが平安後期の書『白山之記』に記載されています。大聖寺は現在の錦城山から荻生町にかけての山の上にあった寺院と考えられています。(『学習帳 歴史編(改訂版)』15頁)

25 鎌倉時代、東国御家人の一人で、伊豆国<sup>いずのくに</sup>を拠点としていた狩野氏<sup>かのうし</sup>は、江沼郡内の庄園<sup>おさ</sup>を治める( )となって勢力を誇った。

- ①肝煎<sup>きもいり</sup> ②郷長<sup>ごうちょう</sup> ③地頭<sup>じとう</sup> ④国主<sup>こくしゅ</sup>

鎌倉時代から南北朝時代にかけて、江沼郡では、江沼郡では、平安時代末以来の武士は姿を消し、代わって東国御家人の外来地頭が勢力をもつようになりました。その代表が狩野氏です。狩野氏は伊豆を本拠とする一族ですが、13世紀半ば以降、江沼郡福田庄の地頭として登場し、やがて庄内の菅生社の領有権をも入手するようになり、江沼郡で最も有力な国人(土豪)にまで成長しました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』19頁)

26 悉曇学<sup>しつたんがく</sup>を学び、わが国の50音字<sup>おんじ</sup>の配列<sup>はいれつ</sup>に大きな影響<sup>えいきょう</sup>を与えた( )は、山代温泉の温泉寺薬王院<sup>おんせんじやくおういん</sup>の僧である。

- ①空海<sup>くうかい</sup> ②最澄<sup>さいちょう</sup> ③延昌<sup>えんしょう</sup> ④明覚<sup>みょうかく</sup>

明覚は、天台宗延暦寺で音韻学を学び、のち加賀山代温泉の温泉寺に隠棲して「温泉房」と号し、「加州隠者」と称しました。悉曇学や梵字の発音などを研究し、我が国の50音字の配列に大きな影響を与えました。現在、薬王院境内にある国指定重要文化財の石造五輪塔は、その供養塔と伝えます。(『学習帳 産業・人物編』48頁)

27 加賀の守護職<sup>しゅごしやく</sup>をめぐる弟幸千代<sup>こうちよ</sup>と争い、越前<sup>ぼうめい</sup>に亡命していた( )は本願寺派と結び、文明6年、越前から加賀に打ち入り、幸千代の蓮台寺城<sup>れんだいじじょう</sup>を陥<sup>おとし</sup>れて守護職<sup>だっかん</sup>を奪還した。

- ①朝倉宗滴<sup>あさくらそうてき</sup> ②織田信長<sup>おだのぶなが</sup> ③富樫政親<sup>とがしまさちか</sup> ④上杉謙信<sup>うえすぎけんしん</sup>

蓮如が吉崎進出した頃は、加賀では守護職をめぐる富樫家兄弟が争っていました。当初は西軍の弟幸千代が優勢で、東軍の兄正親は京都に逃げていましたが、文明3年(1471)北陸の情勢が東軍有利となると、正親は加賀へ戻ったが幸千代の反撃にあい、文明5年(1473)越前に亡命しました。本願寺派の隆盛を恐れた幸千代側が吉崎を攻撃しようとしたので、蓮如の再三の制止にもかかわらず本願寺派は正親と組んで、加賀に打ち入り、幸千代の能美郡蓮台寺城を陥れました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』23頁)

28 元禄2年『奥の細道』で山中温泉を訪れた松尾芭蕉<sup>まつおばしょう</sup>は、泉屋<sup>いずみや</sup>に宿泊し、当時13歳の泉屋の主人( )に俳句の手解きをして「桃妖」の俳号を与えた。

- ①宇吉郎 ②久米之助<sup>とくみ</sup> ③良太郎 ④一之助

元禄2年(1689)7月29日から8月5日まで山中温泉の泉屋久米之助の宿に逗留しました。当時、山中では俳諧を嗜む人が多く、泉屋隠居も俳号を「自笑」と名乗り、金沢の俳人たちとも交流が深く、その縁で芭蕉を招いたものと思われます。芭蕉は久米之助に俳句の手解きをし、自号「桃青」から一字を取って「桃天」の号を与えましたが、天の字は不吉として、「桃妖」にしたといわれています。(『学習帳 産業・人物編』38頁)

29 元禄 5 年、兄の 3 代大聖寺藩主利直としなおから新田 1 万石を与えられ大聖寺新田藩主しんでんとなった  
( ) は、宝永 6 年、上野寛永寺ほうえいで大和柳本藩主織田秀親かんえいじ やまとやなぎもと おだひでちかを刺殺し切腹しさとつ せつぶくを命じられた。

- ①前田利昌 ②前田利明 ③前田利治 ④前田利家

元禄 5 年 (1692) 前田利直の 3 代大聖寺藩主就封の際、弟利昌 (采女) に新田 1 万石を分与したことから大聖寺新田藩が成立しました。宝永 6 年 (1709) 5 代将軍徳川綱吉の葬儀が上野寛永寺で行われ、この葬儀に際し、利昌は柳本藩主織田秀親等とともに勅使の御馳走役を命じられました。この勤めの際、寛永寺塔頭の顕性院で秀親を刺殺したことで切腹となり、大聖寺新田藩も廃藩となりました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』 37 頁)

30 吉崎村肝煎きもいり 鹿野小四郎かのこしろうは、小塩辻村おしおつじむらに移住し、約 15 年間十村役とむらやく つとを勤めた。小四郎は農業の知識ちしきに深く、晩年、そのことを子孫に伝えるため ( ) をまとめた。

- ①『農業全書』 ②『耕稼春秋』 ③『農業余話』 ④『農事遺書』

鹿野小四郎は吉崎村の貧農で、若い頃は船乗りをしていましたが、兄弟 2 人が海難事故で亡くしてから農業に専念するようになり、吉崎村の肝煎役を 11 年年間務めました。その間の働きぶりは、公務に優れ農業にも通じていたので、目附十村に抜擢され、小塩辻村に移住し、約 15 年間にわたって十村役を勤めました。晩年、公務や家業のことをまとめて子孫に伝えるために『農事遺書』全 5 巻を完成させました。(『学習帳 産業・人物編』 30 頁)

31 塩屋村肝煎いさいちようくろ 井斎長九郎いさいちやうくろは、天保 7 年に大聖寺藩植物方奉行しよくぶつがたぶぎやう ( ) より松苗まつなえを砂丘さきゆうに植えるよう命じられ、私財しざいを投じて植林しょくりんを行ない、現在の人工林じんこうりんをつくることに成功した。

- ①大家七平 ②小塚藤十郎 ③鹿野源太郎 ④西野小左衛門

井斎家は祖先より漁業を営む資産家でした。当時、塩屋から片野にかけての一带は打ち上げた砂が西風により飛散し、田畑や人家まで埋める被害をもたらしていました。長九郎は、天保 7 年 (1836) 大聖寺藩植物方奉行小塚藤十郎より砂丘に松苗の植栽を命じられ、私財を投じ、藩からも公金を借用して数年間松苗を植える努力を続けました。(『学習帳 産業・人物編』 23 頁)

32 大聖寺八間道の江沼神社境内はちけんみちに建つ ( ) は、大聖寺藩 3 代藩主前田利直としなおの休息所きゆうそくじよとして建てられたもので、国の重要有形文化財じゅうようゆうけいぶんかざいに指定されている。

- ①無限庵 ②成巽閣 ③竹涇館 ④長流亭

江沼神社境内の熊坂川に面して建っている「長流亭」は、宝永 6 年 (1709) 大聖寺藩 3 代藩主前田利直の休憩所として建てられた数寄屋造りの建物です。「川端御亭」とも呼ばれる柿葺の平屋ですが、欄間や障子、板戸などには斬新なデザインがほどこされ、江戸期の加賀・大聖寺両藩の文化水準と工芸技術の高さを今に伝えるものとして高い評価を得ています。(『学習帳 歴史編(改訂版)』 35 頁)

33 大聖寺城主の山口玄蕃宗永父子げんばむねながは、慶長 5 年けいちやうに ( ) の大軍を率いる金沢城主前田利長としながと戦い、大聖寺城内じけつで自決した。山口軍はこの合戦で 800 人余りの死者を出した。

- ①1 万 5000 人 ②2 万 5000 人 ③3 万 5000 人 ④4 万 5000 人

大聖寺城主の山口玄蕃宗永父子は、慶長 5 年 (1600) 8 月 3 日に 2 万 5000 人の大軍を率いる金沢城主前田利長と戦い、大聖寺城内で自決しました。山口軍はこの大聖寺合戦で 800 人余の家臣が戦死した。この大聖寺合戦では 1200 人余の山口軍が僅か 1 日で敗戦し、800 人余の家臣が討ち死にしました。一方、利長軍では長連龍の家臣が鐘ヶ丸の戦いで多く戦死しました。いまも彼らの墓は錦城中学校前の住宅地とつほかに「四墓」として残っています。(『学習帳 歴史編(改訂版)』 31 頁)

34 大聖寺藩前田家の菩提寺ぼだいじである ( ) の裏山には、大聖寺藩歴代藩主の墓が建っている。

- ①本光寺 ②全昌寺 ③慶徳寺 ④実性院

大聖寺の南はずれ、下屋敷から神明町にかけての一带は、山ノ下寺院群と称し、禅宗・浄土宗・日蓮宗の各派の寺院が並んでいます。その最も南側に位置する実性院は大聖寺前田家の菩提寺となっています。寺の後ろの石段を登ったところには、初代から 14 代までの歴代藩主すべての墓が並んでいます。(『学習帳 歴史編(改訂版)』 35 頁)

35 大聖寺藩の初代藩主前田利治としはるの母は、2代将軍徳川秀忠ひでただの二女（ ）であり、のちに天徳院てんとくいんと呼ばれた人である。

- ①篤姫 ②珠姫 ③振姫 ④千姫

慶長5年(1600年)、2代将軍徳川秀忠の二女珠姫は前田利常と結納をかわし、翌6年、江戸から金沢に入りました。この時、玉姫はわずか3歳でした。24歳という年齢で早死にをした珠姫でしたが、この間、8人もの子をもうけています。大聖寺敷地町の菅生石部神社には、絢爛豪華な婚礼調度品の一部が寄進され、現在、市の指定文化財となっています。(『学習帳 産業・人物編』46頁)

36 山代温泉薬王院が所蔵する十一面観音立像じゅういちめんかんのりゅうざうは、もと白山五院の一つで、大聖寺の後身こうしんといわれる（ ）の本尊ほんぞんとして祀まつられていたと伝えられている。

- ①実性院 ②慈光院 ③医王寺 ④全昌寺

山代温泉薬王院に安置されている「木造十一面観音像」は、もと大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、関ヶ原の戦いの折、大聖寺城主山口玄蕃頭が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同じ白山五院のひとつであった薬王院に移されたもので、平安時代末期の白山信仰の本地仏として貴重な仏像です。(『学習帳 民俗・文化財編(改訂版)』47頁)

37 大聖寺藩では、江戸中期から菜種油なたねえや荏油えのほかに桐油きりや梹油たぶも多く生産した。桐油の生産量は、江戸後期に（ ）の村々が領内の80%を占めていた。

- ①東谷 ②西谷 ③三谷 ④菅谷

大聖寺藩では、江戸中期から菜種油や荏油のほかに桐油(油桐実を搾る)や梹油(梹実を搾る)も多く生産しました。桐油の生産量は、江戸後期に三谷の曾宇・直下・日谷村が領内の80%を占めていました。江戸末期には「大聖寺桐油」と称して加賀藩をはじめ、他領へも知られる産物となりました。これは、灯油のほか、油紙・合羽・害虫駆除用などに多く使用されました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』44頁)

38 大聖寺藩主の在任期間は、5代前田利道としみちの42ヵ年や2代前田利明としあきの33ヵ年を除けば、短期間の藩主が多かった。とくに、13代（ ）の在任期間はわずか5ヵ月であった。

- ①前田利行 ②前田利治 ③前田利之 ④前田利常

大聖寺藩主の在任期間は、藩祖利治が22ヵ年、2代利明が33ヵ年、3代利直が19ヵ年、4代利章が27ヵ年、5代利直が42ヵ年、6代利精が5ヵ年、7代利物としなむねが7ヵ年、8代利考が18ヵ年、9代利之が31ヵ年、10代利極が2ヵ年、11代利平が12ヵ年、12代利義が7ヵ年、13代利行が5ヵ月、14代利鬯が15ヵ年でした。また、襲封年齢は、5代利直が5歳、8代利考が10歳、11代利平が16歳、12代利義が17歳、14代利鬯が15歳でした。(『学習帳 歴史編(改訂版)』34頁)

39 大聖寺西端の錦城山きんじょうざんには、南北朝時代から元和元年まで数度にわたって大聖寺城が築きずかれた。安土桃山時代には（ ）の与力よりき、溝口秀勝みぞぐちひでかつも大聖寺城の改修を行った。

- ①丹羽長秀 ②織田信長 ③豊臣秀吉 ④小早川秀秋

賤ヶ岳の戦いにより、江沼郡では、丹羽長秀の与力、溝口秀勝が4万4000石の領主として大聖寺城に入り当地を治めることになりました。秀勝が江沼郡を支配した期間は約15年ほどですが、大聖寺城を本格的な領主居城とするために、本丸の周囲に大規模な横堀と土塁を巡らせて、周囲の曲輪との差別化を図るなど、大改造を行ないました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』30頁)

40 今年夏、加賀の高校生を中心に実施された「加州大聖寺藩参勤交代うおーく2019」は、第



10 代藩主前田利極としなかの交代時のデータを参考にしたものであるが、行列として最大の 397 人の交代を行った藩主は、第 9 代（ ）である。

- ①前田利治としはる ②前田利之としこれ ③前田利行としみち ④前田利啓としか

大聖寺藩の参勤交代は、江戸に行く参勤 89 回と国元に帰る交代 92 回の計 181 回行なわれていたことが確認されています。外様大名は毎年 4 月の実施と定められていましたが、藩祖利治は 9 月・10 月に参勤交代を行なっています。大名行列の人数は、大聖寺藩では平均すると 250～300 人程度ですが、文政 5 年（1822）4 月、9 代利之は最大の 397 人で交代を行っています。（『学習帳 歴史編(改訂版)』36 頁）

41 伊能忠敬いのうただたから測量隊そくりょうたい 8 人は、享和 3 年、大聖寺藩領きょうわの沿岸えんがんを測量したが、この間、大聖寺町の板屋や松屋、片野村の肝煎宅きまいり、橋立村の（ ）などに宿泊した。

- ①因随寺いんずいじ ②願成寺がんじょうじ ③称名寺しょうみょうじ ④恩栄寺おんえいじ

伊能忠敬は享和 3 年（1803）2 月 25 日に江戸を出立し、東海・北陸・佐渡を測量して、10 月 7 日に江戸へ帰着するという第 4 次測量を行いました。忠敬ら測量隊 8 人は、同年 6 月 24 日に吉崎（本願寺かけ所泊）から大聖寺町に入り、同日に本町の板屋泊と松屋泊、25 日に片野村の肝煎泊、26 日に橋立村いんずいじの因随寺（現福井別院橋立支院）泊をもって大聖寺藩領の海岸部を測量しました。（『学習帳 歴史編(改訂版)』39 頁）

42 加賀市（ ）には、寿永 2 年の源平争乱げんぺいそうらんで戦死した斎藤実盛さいとうさねもりの霊れいを鎮めるために築いたと伝えられる「実盛塚さねもりづか」がある。

- ①源平町 ②篠原新町 ③手塚町 ④伊切町

加賀市篠原新町には、寿永 2 年（1183）の源平争乱で戦死した斎藤実盛の霊を鎮めるために築いたと伝えられる「実盛塚」があります。また、この塚の近くの同市手塚町には実盛の首を洗ったと伝えられる「首洗池くびあらいけ」もあります。さらに、同市深田町には実盛が白髪を染めるときに使用した鏡を投げ入れたと伝える「鏡の池」があります。（『学習帳 歴史編(改訂版)』18 頁）

43 加賀市八日市町には、平安時代末期の歌人（ ）が弟子の西住さいじゅうと別れたと伝える場所に「都もどり地蔵」がある。西住は師と別れたのち、大聖寺川支流の杉ノ水近くに居住したと伝えられる。

- ①西行法師 ②大伴家持 ③紀貫之 ④喜撰法師

加賀市八日市町には、平安時代末期の歌人であるが弟子の西住と別れたと伝える場所に「都もどり地蔵」があります。両僧は加賀国を訪れたとき、大聖寺川支流の杉ノ水近くに滞在し、やがて両僧は八日市で別れたものの、西住は再び大聖寺川支流の杉ノ水近くに定住したと伝えられています。西住が定住した地は、後に西住村と称したといわれます。（『学習帳 民俗・文化財編(改訂版)』55 頁）

44 加賀市大聖寺の（ ）には、京都の仏工山本茂祐ぶつこう もすけが慶応 3 年から明治初年にかけて製作した 500 体全てが揃った「五百羅漢像ごひゃくらかんぞう」が残っている。

- ①実性院 ②久法寺 ③全昌寺 ④宗寿寺

加賀市大聖寺町の全昌寺には、京都の仏工山本茂祐が慶応 3 年（1867）から明治初年にかけて製作した 500 体の「五百羅観音」（木製）が残っています。同寺には 500 体の五百羅観音の外、3 体の釈迦三尊像、10 体の十大弟子尊像、4 体の四天王尊像などが、色彩豊かに保存状態も良好な形で残されています。また、製作記録と寄進者を記録した台帳も現存しており、造立年代や寄進者の名前・住所まで知ることができます。（『学習帳 民俗・文化財編(改訂版)』54 頁）

45 大聖寺藩医はんい、榎田幻覚かしだげんかくの七男大田錦城おおたきんじょうは、江戸で儒教じゅきょうの古典籍こてんせきについて記した（ ）を出版するなど活躍した。

- ①柳橋日録 ②錦城文録 ③稽古録 ④九経談

大聖寺藩は、幕府や諸藩と同様に江戸前期から儒学を学ぶ儒者を多く輩出しました。なかでも、大聖寺藩医榎田幻覚の 7 男大

田錦城は、江戸で儒教の古典の論語などを記した『九経談』(全10巻)、東アジア各国の国名や地名をまとめた『海外諸国名録』(全1巻)、漢籍や詩について書き留めた『柳橋日録』など全143冊を著し大活躍しました。(『学習帳 民俗・文化財編(改訂版)』52頁)

46 明治元年、大聖寺藩は官軍から20万発の弾薬・雷管の調達を命じられ、その資金不足を補うために( )の麓の洞穴で偽金をつくった。

- ①大日山 ②鞍掛山 ③寺尾山 ④錦城山

大聖寺藩は官軍から弾薬(パトロン)の調達を命じられた際、その資金不足を補うために一歩銀や銀の簪などを集めて、御城山(錦城山)下の洞穴で二歩金を偽造しました。この貨幣の偽造事件をパトロン事件といいます。藩は事件の発覚後に、市橋波江に全責任を負わせ、その切腹をもって終結させました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』50頁)

47 当地では、( )4年、増税の見直しや十村の廃止を要求する農民一揆が起こったが、この一揆は、胴ミノを着た農民の姿が蓑虫に似ていたので「みの虫一揆」と呼ばれている。

- ①正徳 ②天保 ③文久 ④明治

明治4年(1871)11月24日、大聖寺藩領内において、増税の見直しや十村の廃止を要求する農民一揆が起きました。この一揆は、胴ミノを着た農民の姿が蓑虫に似ていたので「みの虫一揆」と呼ばれています。(『学習帳 歴史編(改訂版)』51頁)

48 明治11年、明治天皇は総勢( )人を引き連れ、北陸巡幸を行なった。

- ①198 ②398 ③598 ④798

明治11年5月、明治政府は太政官布告で天皇の北陸道・東海道の巡幸を行なうことを発表し、8月30日に東京を出発しました。このときの一行は、右大臣岩倉具視や参議大隈重信らを従え、総勢798人という空前の人数でした。(『学習帳 歴史編(改訂版)』52頁)

49 明治12年4月、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所を会場に、15日間にわたって( )博覧会が開催された。

- ①大聖寺 ②江沼 ③十万石 ④錦城

明治12年(1879)の4月から5月にかけての15日間、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所を会場に「大聖寺博覧会」が盛大に開催されました。この博覧会は、旧大聖寺藩の家老前田幹や権大参事飛鳥井清らの企画によるもので、明治維新後の江沼郡初の博覧会の開催でした。(『学習帳 歴史編(改訂版)』54頁)

50 明治24年の大津事件で、ロシア皇太子ニコライの命を救った車夫の一人、北ヶ市市太郎の出身地は現在の加賀市( )町である。

- ①西島 ②加茂 ③桑原 ④動橋

大津事件で、ロシア皇太子の命を救った北ヶ市市太郎は江沼郡庄村字加茂(現在の加賀市加茂町)の出身で、29歳で京都に出て人力車の車夫になったと伝えられています。事件後は、日露両国政府から褒賞をあたえられ、一躍、救国の英雄として全国から注目を集めることになりました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』55頁)

51 明治11年、大聖寺に初めての本格的な銀行である( )銀行が設立された。

- ①七十七 ②八十四 ③百五 ④百十四

明治11年(1878)11月、大聖寺に、初の本格的な銀行である第八十四国立銀行が設立されましたが、その後、関東大震災や世界恐慌とそれに伴う大聖寺の織物業の不振などのあおりを受け、昭和2年(1927)3月に突然の休業に入りました。(『学習帳 歴史編(改訂版)』55頁)

52 加賀市大聖寺出身の政治家、竹田儀一は、昭和23年に、芦田内閣のもと（ ）大臣として入閣した。

- ①法務 ②厚生 ③建設 ④農林

大聖寺出身の竹田義一は、京都大学法学部を卒業後、弁護士や市議員などを経て、昭和5年に衆議院議員選挙に立候補して当選。戦後は、日本民主党を結成し初代幹事長に、翌23年芦田均内閣のときの厚生大臣として入閣しました。『学習帳 歴史編(改訂版)』61頁)

53 平成22年の国勢調査における加賀市の産業別就業者の比率を見ると、第1次産業の農林水産業にたずさわる人は、およそ（ ）%である。

- ① 3 ② 12 ③ 26 ④ 35

平成22年の国勢調査によれば、加賀市の産業別就業者の比率は、農林水産業などの第1次産業が3.1%、建設・製造業を中心とした第2次産業が35.1%、飲食店やサービス業、運輸業などに従事する第3次産業は60.0%となっています。昭和55年からの推移を見ると、第1次産業の比率は減少を続けています。『学習帳 学習帳 産業・人物編』6頁)

54 加賀市におけるお茶の栽培は、江戸時代、大聖寺藩主が（ ）から茶の実を取り寄せ、領内で栽培させたことで始まったという。

- ①鹿児島 ②静岡 ③三重 ④京都

加賀市における茶の栽培は、大聖寺藩2代藩主前田利明が藩の産業開発として、京都から茶の実を取り寄せ、当地に茶栽培を命じたのが始まりとされています。明治初期には藩の指導的立場にあった東方芝山や貿易商大沢十次郎らの努力により、打越村を中心に広く栽培されるようになりました。『学習帳 産業・人物編』7頁)

55 加賀市内には、昭和56年に整備された宇谷野工場団地と平成9年に整備された（ ）工場団地の2カ所の工場団地がある。

- ①小塩辻 ②富塚 ③篠原 ④新保

市内の工場団地では、宇谷野工場団地と小塩辻工場団地があります。宇谷野工場団地は昭和56年(1981)に市内宇谷町の山林およそ27万㎡を造成しオープンしました。一方、平成9年(1977)には、小塩辻町地内の丘陵部15haが工場団地用地として造成され「長津工業(株)」や「榎横井包装」などが進出しました。『学習帳 産業・人物編』12頁)

### 専門テーマ「蓮如」

56 浄土真宗中興の祖と呼ばれた蓮如は、父存如の跡を継ぎ、長禄元年、本願寺第（ ）世となった。

- ① 2 ② 4 ③ 6 ④ 8

蓮如は応永22年(1415)、本願寺第7世存如の長子として生まれました。永享3年(1431)天台宗門跡寺院青蓮院において得度し、長禄元年(1457)、父の死去により本願寺第8世を継ぎました。その後、「御文」や「名号」による布教活動により本願寺の教線を大きく拡大させました。『学習帳 産業・人物編』51頁)

57 蓮如の次男蓮乗は河北郡二俣本泉寺を、三男蓮綱は能美郡波佐谷松岡寺を、4男連誓は江沼郡山田（ ）をそれぞれ拠点としたことで、ここに加州三ヶ寺体制がつけられた。

- ①明経寺 ②正願寺 ③空善寺 ④光教寺

河北郡二俣本泉寺は蓮如の次男蓮乗が、能美郡波佐谷の松岡寺は3男蓮綱が、そして、江沼郡山田の光教寺には、4男連誓が入り

ました。これらの蓮如の子が住持する3ヶ寺を「加州三ヶ寺」といい、蓮乗・蓮綱・蓮誓の3兄弟を「三山の大坊主」と呼んでいます。(『学習帳 産業・人物編』 51頁)

58 蓮如が、比叡山延暦寺の衆徒に追われ、北陸まで逃げ延び、( ) に道場を構えたのは文明3年のことであった。

- ①吉崎 ②塩屋 ③瀬越 ④三木

15世紀中頃、蓮如は比叡山延暦寺衆徒に追われ、近江国を転々としていました。結局、文明3年(1471)7月北陸にまで避難し、加賀・越前の国境、吉崎に道場を開きました。荒地であった吉崎は急速に発展し、一帯は坊舎や門徒が参詣するための宿泊所が立ち並び、寺内町が形成されました。(『学習帳 産業・人物編』 51頁)

59 蓮如は、明応8年、山科本願寺で波乱の生涯を終えたが、このとき彼は( ) 歳であった。

- ① 55 ② 65 ③ 75 ④ 85

蓮如は、明応8年(1499)3月25日、山科本願寺において85歳で没しました。妻の死別を4回に渡り経験し、生涯に5度の結婚をし、男子13人・女子14人の計27人の子をもうけたといわれています。(『学習帳 産業・人物編』 52頁)

60 加賀市( ) 町では、毎年、お盆の時期、海辺で「シャシャムシャ踊り」と呼ぶ踊りが行なわれるが、これは蓮如上人が伝えたといわれ、別名「蓮如踊り」とも呼ばれている。

- ①橋立 ②黒崎 ③塩屋 ④片野

加賀市塩屋町では、シャシャムシャ踊りと呼ぶ、笛や太鼓の囃子がなく、素朴で哀愁漂う盆踊りが伝えられています。この踊りは、別名「蓮如踊り」とも呼ばれており、その昔、蓮如が伝えたと言われています。(『学習帳 民俗・文化財編(「改訂版」)』 57頁)